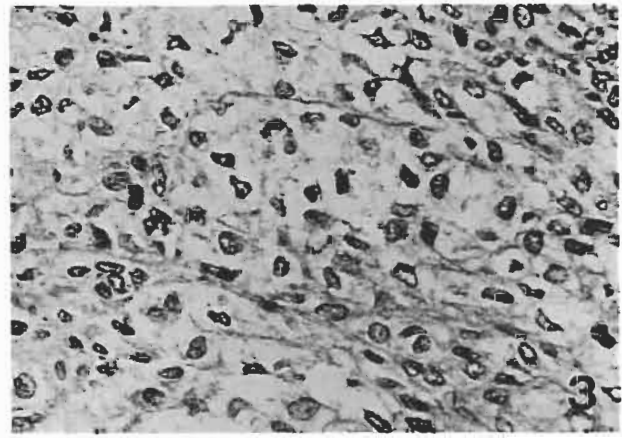
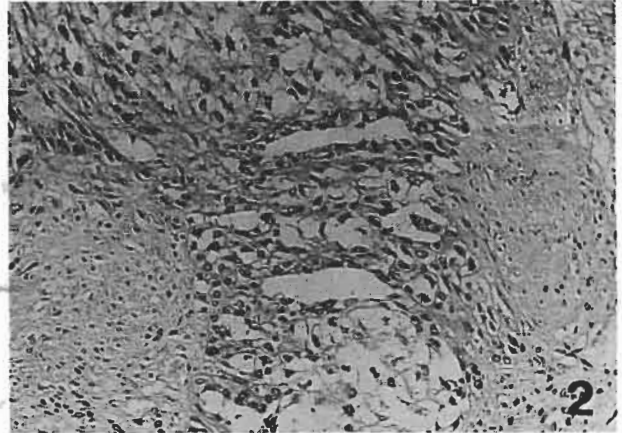


牛の腎臓

日本獣医畜産大学獣医病理学教室出題 第33回獣医病理学研修会標本No.606



動物：牛，ホルスタイン種，雌，6才。

臨床事項：1992年1月から食欲漸次減少し，直検及び超音波検査で右腎の腫大が確認された。赤血球数 $1.178 \times 10^4 / \text{mm}^3$ ，Ht値72%と多血症を呈した。輸液などが繰り返されたが，多血症状態が持続した。軽度のアシドーシスとケトン尿を示し，起立不能となり，4月4日に殺後，剖検に付された。

剖検所見：右腎頭側に，厚い被膜で覆われた直径24cmの弾性やや軟の腫瘤があり，腎実質との境界は明瞭であった。剖面で腫瘤は大小の分葉状で黄白色脆弱な部分が多く，砂粒状物質を含んでいた。赤色漿液を入れた嚢胞，出血，壊死部も見られた。

組織所見：腎臓実質とは厚い結合織で境されており（写真1左下），腫瘍は，大小嚢胞及び充実胞巣状構造を示し，石灰沈着もみられた（写真1）。結合織の近くでは明らかな管状構造が認められた（写真2）。胞巣状部分は，不定形で空胞状の核と，好酸性空胞状で境界不明瞭な細胞質をもった細胞か

らなっていた（写真3）。樹枝状に入り込んだ結合織の近くでは細胞は索状ないし腺様構造を示し，胞巣の中心部では水様明調であった。PAS陽性小顆粒を含む細胞も少なくはなかった。免疫組織化学的に，胞巣辺縁及び管状構造がビメンチン陽性を，一部の結合織付近でデスミン陽性であった。電顕観察では，ミトコンドリアが目立つ細胞と，glycogen-richな細胞が混在し，脂肪滴もかなり認められた。一部で，細胞間接着装置も観察された。

考察：上皮性腫瘍としての性質が全体的に不明瞭であったので腎芽腫を疑ったが，blastemaの細胞ではなく，明調細胞が主であること，ビメンチン陰性であり管腔構造は未熟尿管様ではないことなどから，腎細胞癌であり，優勢な組織像から充実性，明細胞型と考えた。多血症を示す腫瘍として興味もたれた。

なお，討論では，副腎癌とする意見が出された。

診断：腎細胞癌